

舎密局の開講

戦前期に長く京都帝国大学と密接な関係を持ち、敗戦後に京都大学に統合された第三高等学校は、その前身を明治2(1869)年大阪に設置された舎密局^{せいみ}まで遡ることができる。明治新政府は旧幕府時代の教育機関をいくつか引き継いで自らの管轄下に置いたが、舎密局も幕末に長崎に設置されていた分析究理所を再興したものであった。蘭学の伝統のある大阪の地に、舎密局は化学・物理の学校として開講することになった(註1)。

舎密局は、教頭にオランダ陸軍軍医ハラタマを迎え、明治2年5月1日に開講式を行った。ハラタマは開講式で「理化二学」は「漸く文明開化に及ぶ人民に在ては不可欠の学術」とあり、化学・物理教育の重要性を説いた上で、開講後は自ら講義・実験を行い、さらに校外から依頼された分析試験や調査もこなすなど精力的に活動した。

しかし、開講時の生徒数はわずか5人であったといわれ、その後若干増加するものの、高度な教育内容と生徒たちの基礎学力とが適合せず、改編への動きが強まるようになる。そして舎密局は、化学所、理学所と名称変更ののち、明治3年10月に語学を中心とした一般教育機関である洋学校と合併して開成所となり、単一の理化学学校としての性格は失われることになった。

舎密局本館。(1-1)



大阪舎密局開講記念写真。開講式当日の5月1日に撮影された。前列右から2人目がハラタマ、1人おいて左がハラタマを日本に招いた蘭医ボードイン。後列右から舎密局御用掛田中芳男、同平田助左衛門、何礼之助(かれいのすけ)。(1-2)



御城外大調練之図(錦絵、長谷川小信画)。明治初期、陸軍の大阪鎮台兵の訓練の様子が描かれている。左手に「セイミ局」と書かれた建物が見える。(1-3)

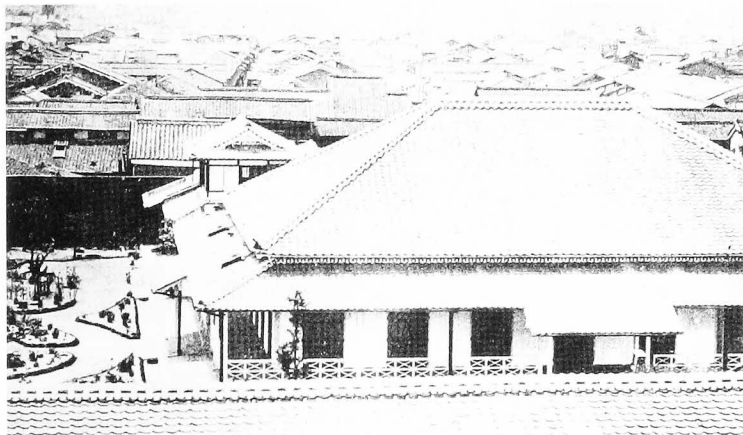


(註1) 舎密という語の由来は、化学という意味のオランダ語Chemieである。

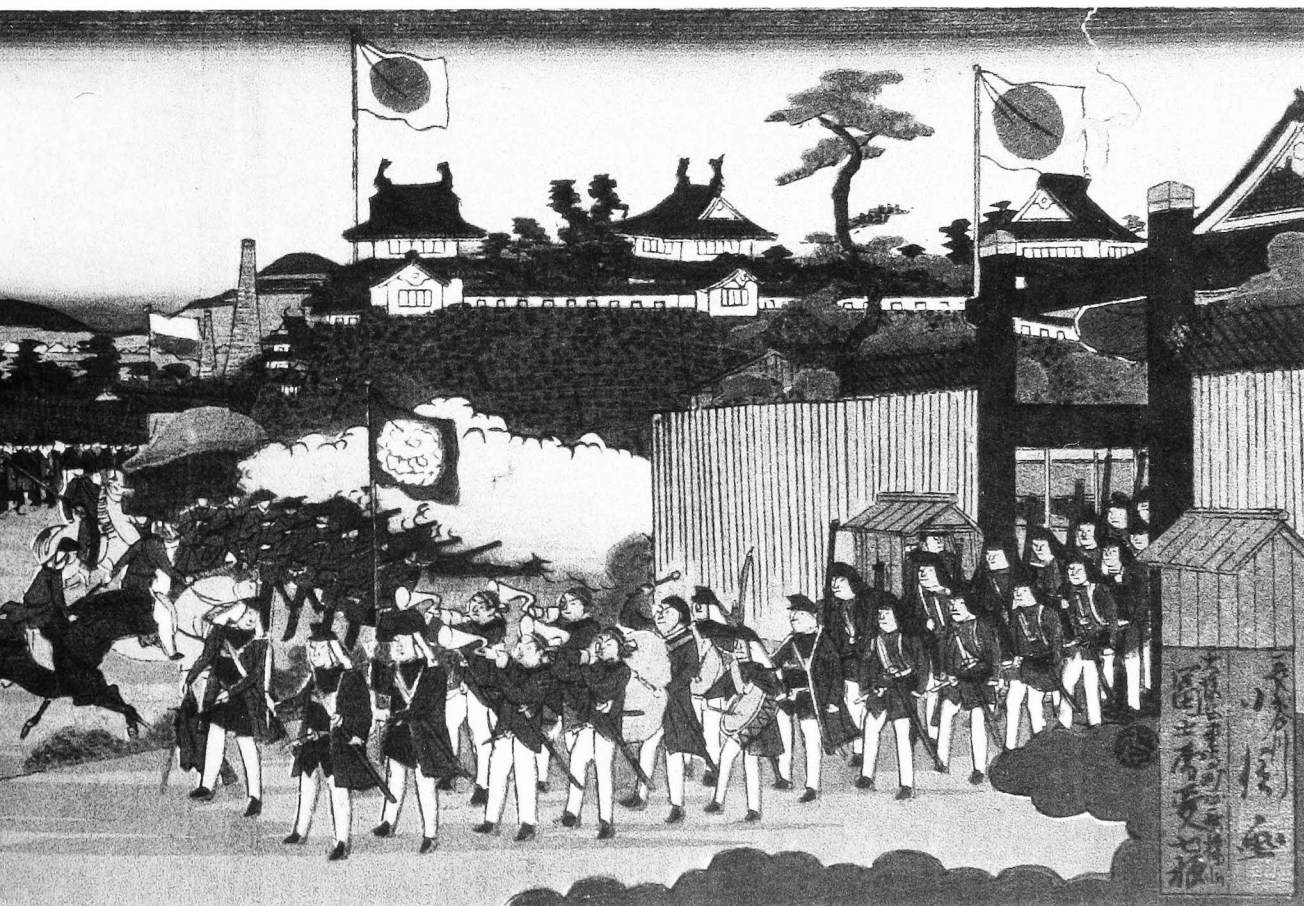
舎密局創立之起源
 舊幕府之末年、當り荷蘭第一等官醫
 ホーティンと長崎病院に聘し、函道を教授
 せし。當時製藥家之其道、鴻益を蒙るを
 識り、一大局と造營し、其教師を迎ふ。慶應
 二年丙寅二月、荷蘭第二等理化二學教頭
 ハラタマ着岸せし。之を為し、製藥局と改め、理化
 二學の講述場とし、理化試験等の教授を始む。
 政府後、新に許多の器械を注ぎ、大に之を
 盛せんとす。乍ら然原と長崎を西隅の僻境

「舎密局創立之起源」。舎密局創立に至る過程が記録されている。(1-4)

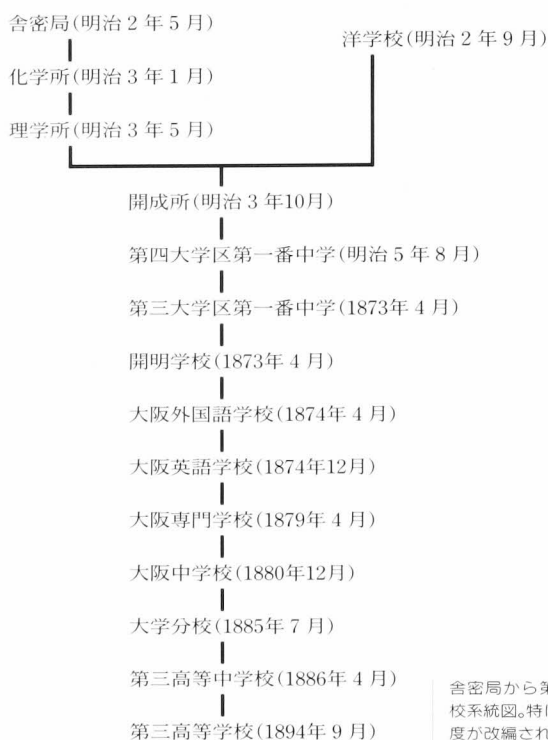
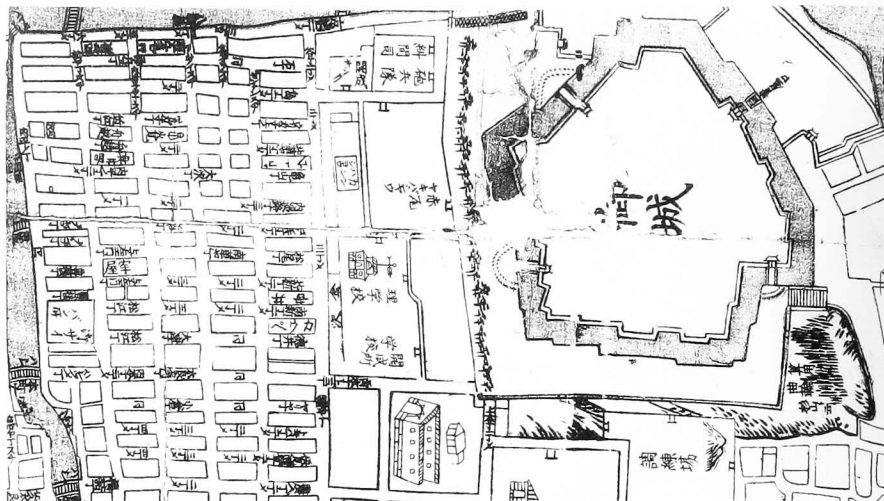
ハラタマの居宅。舎密局に隣接していた。(1-5)



『理化新説』。ハラタマが舎密局で行った講義を舎密局助教三崎崎輔が翻訳・筆録したもの。(1-6)



明治4年10月刊の大阪図(部分)。大阪城の西側に「開成所学校 理学校」とある。(1-7)



舎密局から第三高等学校までの学校系統図。特に初期の頃は頻繁に制度が改編されている。(1-8)

学校制度の変転

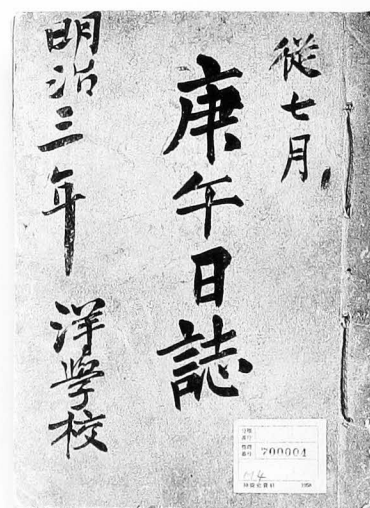
舎密局から第三高等学校に至るまで、京大の前身校は他に例を見ないほど制度が改編されている。30年弱の期間で校名の変更は10回を超え、1年続かなかった名称も珍しくなかった。

これは、一つには当時の中等教育政策が固まっていなかったことが要因として挙げられるが、もう一つ重要なのは、これら前身校自体の動向であった。西日本における最もハイレベルの教育機関であった前身校は、東京に設置された高等教育機関(1874年東京開成学校、1877年から東京大学)への進学を目的とする予備教育機関と、専門教育を授ける完結した教育機関の二つの役割を当初から持っていた。そして、基本的には前者の役割を中心としつつも、後者、つまり大学へ昇格しようとする動きが時に表面化し、制度の改編が図られることになったのである(例えば大学分校)。

このような制度改編は必ずしも成功したわけではなかったが、他の同等の教育機関と比べた場合、前身校の際立った特徴であったといえ、第2章で述べるように、第二の帝国大学が創設される基盤の一つとなったのである。



何礼之助(1840~1923)。長崎通事出身で、洋学校設立の中心人物となった。のち貴族院議員。(1-9)



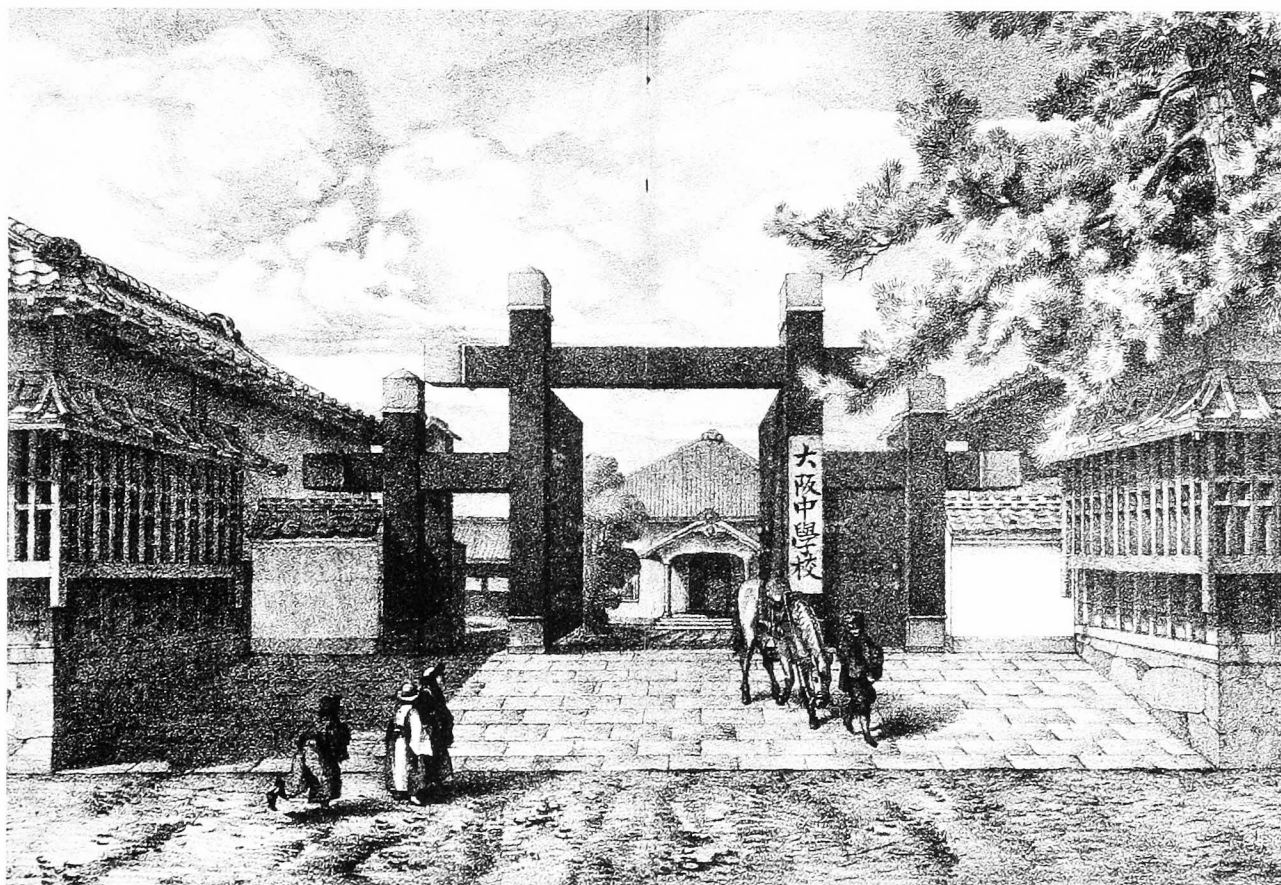
「庚午日誌(こうごにっし)」。洋学校での様子が綴られている。(1-10)



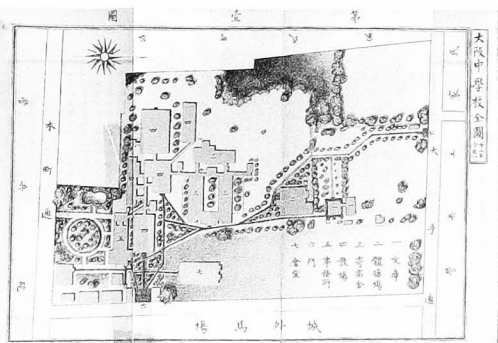
大阪英語学校正面。(1-11)

[illegible]

大阪英語学校試案一覧表。各学期末に一斉に試験が実施され、生徒に順位がつけられた。いちばん上の欄にあるように授業の多くが外国人教員によるものだった。(1-12)



大阪中学校正門。『大阪中学校一覽 從明治十六年九月至明治十七年八月』に掲載されている石版画。(1-13)



大阪中学校全図。舎密局以来の建物はすでに存在していない。(1-14)

大阪時代の学生生活

前項で述べた学校制度の変転の影響もあって、前身校の生徒数は多いときは1,000人近く、少ないときは60人前後と大きく変動した。生徒の定着率もきわめて低く、特に初期の頃はせっかく入学しても退学、転学する生徒が大部分だった。舎密局以来の最初の卒業生が出たのは、大阪英語学校時代の1878年のことであった。

しかし、その後生徒の定着率が高くなるにつれ、教室での授業以外にも生徒参加の活動が増えていくことになる。大学分校時代に始まった陸上運動会は、多くの観客を集める華やかな行事であった。運動会は京都移転後も評判をよび、祇園祭や葵祭と並ぶ京都の三大行事とまでいわれるようになった。

また、第三高等中学校時代の1888年3月には、初めて修学旅行が実施された。これは、すでに行われていた兵式教練の行軍に野外学習の性格を加味したもので、奈良・月ヶ瀬・笠置方面へ往復約130キロを5泊6日で踏破した。参加者は軍隊式に編成され、途中で演習も行うという本格的なものであった。

生徒の生活の場である寄宿舎も整備され、多いときには全生徒の6割以上が入舎していたこともあった。寄宿舎では日常の運営が次第に舎生の責任に委ねられるようになっていき、のちの三高自由寮の萌芽が見られ始めた。



開成所の生徒。まだ刀を手にしている。(1-15)

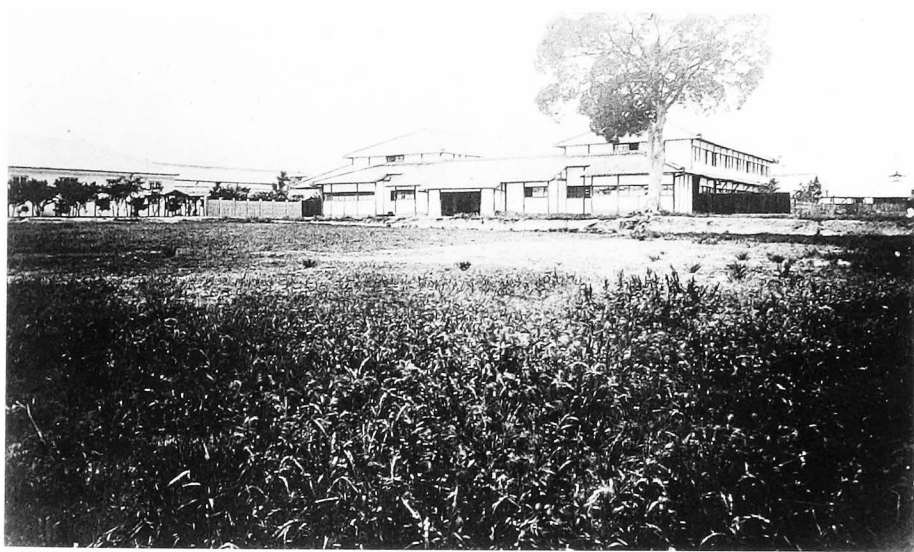
大阪英語学校の職員および生徒。幼い顔の生徒もいるが、規則上の入学年齢は14歳であった。(1-16)



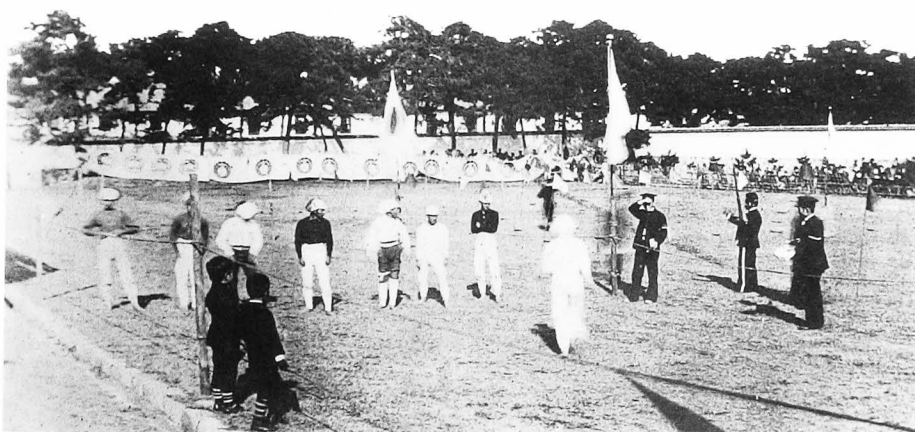
大阪専門学校の生徒。(1-17)



大阪中学校体操教場。大阪中学校では体操が重要視され、全学年毎日30分ずつ行われることになっていた。(1-18)



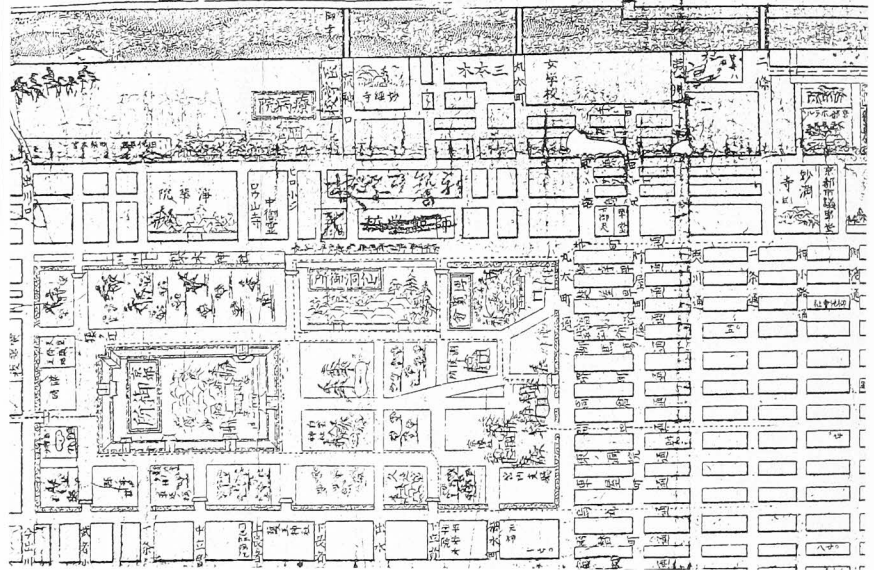
大阪中学校寄宿舎遠景。(1-19)



大学分校時代の運動会の様子。(1-20)

第三高等中学校第二回修学旅行紀事
 維明治二十有一年三月我が第三高等中学校方ニ是ノ第二
 學期後ノ休業ヲ期シ生徒ヲ率テ奈良月瀬笠置ニ向ヒ五宿
 ノ旅行ヲ試ム即職員二十一各部署ヲ定メ有志生徒九十
 九名ヲ軍隊ニ擬シ一個中隊ニ編制シ同月三十一日午前第
 九時隊ヲ整ヘ第十時校ヲ發ス城東玉造ヨリ出デ猫間平
 野ノ二水ヲ渡リ本莊村ニ至リテ始メテ小憩ス大今里村ヲ
 過キ深江村ニ至ル此ニ於テ攝州東成郡ヲ去リテ河州若江
 郡ニ入ル午前十一時四十分新喜田新田ニ至ル是ノ地大阪
 ヲ距ルコト二里強茶店三所ニ於テ行厨ヲ興ス凡テ全軍ノ

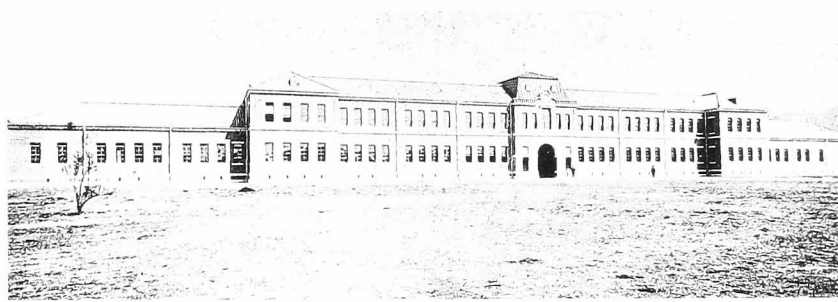
第三高等学校の第1回修学旅行に関する記事。(1-21)



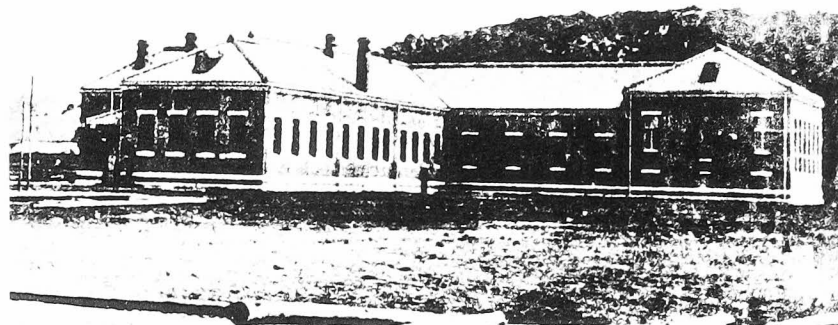
008



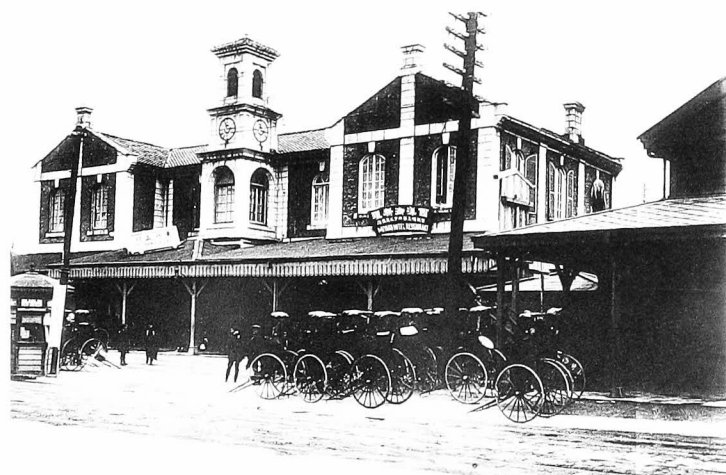
第三高等学校遠景。右側に本館、左奥に寄宿舎が見える。現在の医学部構内あたりからの景色と思われる。(1-24)



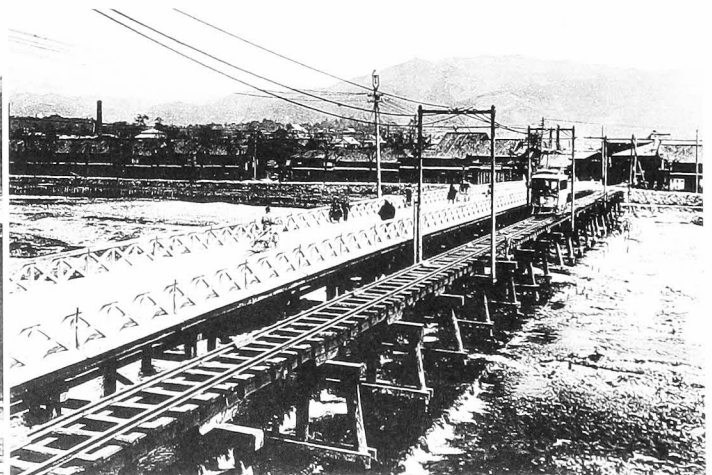
竣工直後の第三高等学校本館(1889年竣工、山口半六・久留正造設計)。のち京都帝国大学の理工科大学が使用した(第2章参照)。(1-25)



化学実験場(1889年竣工、山口半六・久留正造設計)。のち増築が重ねられ、京大の採鉱冶金学教室となった(第2章参照)。(1-26)



初代の京都駅。1877年に開業。第三高等学校移転と同年の1889年には東京までの東海道線が全通した。(1-27)



二条で鴨川を渡る京都電気鉄道(京電)鴨東線。1895年に開通した。(1-28)

第三高等中学校から第三高等学校へ

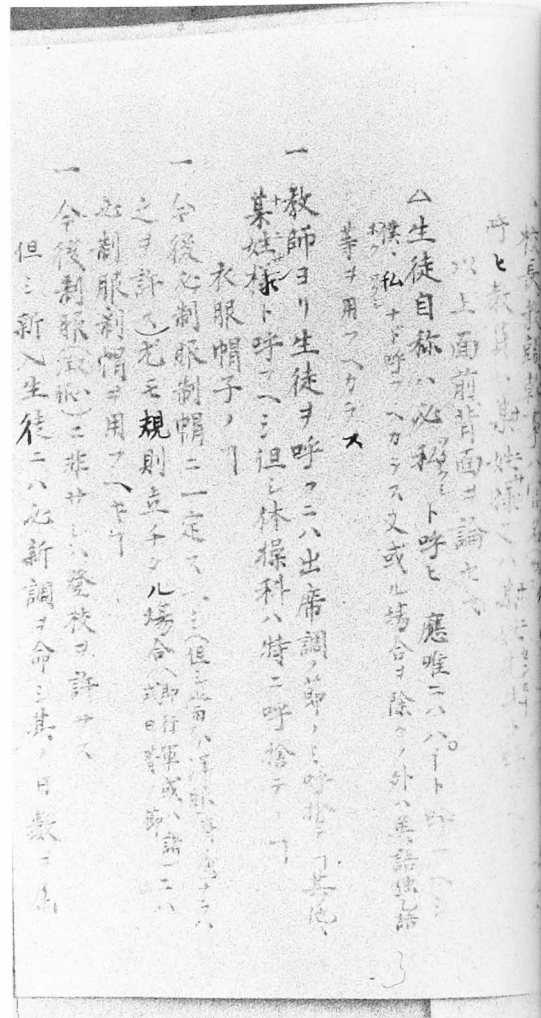


折田 (おりた) 彦市 (1850 ~ 1920)。長く三高の校長をつとめた。生徒の自主性・自覚性を重んじ、三高の校風の形成に大きな影響を与えたといわれている。(1-29)

京都移転の頃から生徒に関する諸規則の整備が本格的に始まるが、それはすなわち自由であったといわれる三高の校風が形成される時期といえることができる。その典型は「称呼ノ事」であり、教職員と生徒がお互いに「さん」付けて呼び合うというこの規程は、生徒による運動会や寄宿舎の運営、王辰会(のち嶽水会)を中心とした課外活動の隆盛などと合わせ、三高の独自性を示すものであった。

第三高等中学校の独自性は制度面でも表われていた。帝国大学への進学課程以外に医学部と法学部が置かれたが、これらは完結した専門教育を目的としており、他の高等中学校とは一線を画していた。この志向は、1894(明治27)年公布の高等学校令によって第三高等学校と改称されて一層明確になる。帝大進学課程である本科および予科が廃止され、法・医・工の三つの専門学部のみで構成されるようになったのである。この改編は、将来の大学への昇格を視野に入れたものであった。

しかし、やがて京都帝国大学の創立が具体化するなかで法・工学部は廃止され(医学部は岡山医学専門学校として独立)、大学予科が復活する。そして校地も京大に譲って南隣(現:総合人間学部構内)に移転し、以後は敗戦後の教育改革まで改編への動きは見られることなく、帝大進学を目的とした一般の高等学校として存続することになるのである。



京都移転直後の第三高等中学校の生徒たち。(1-30)

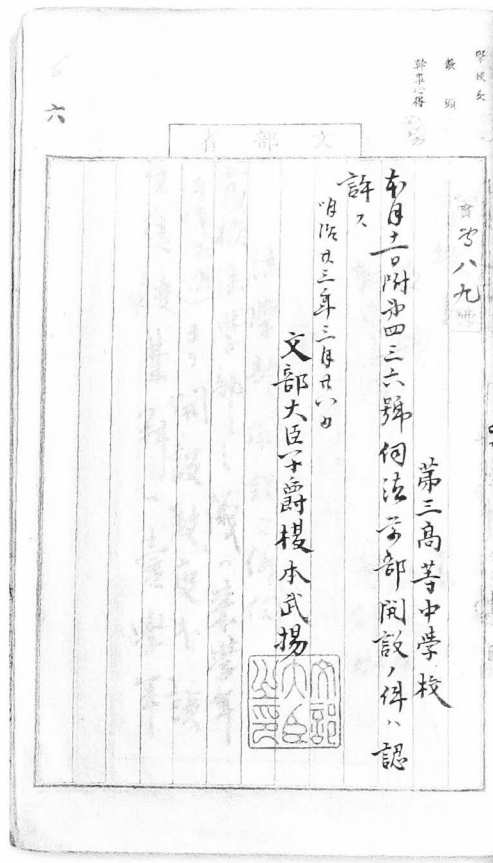


第三高等学校における「生徒取締上ノ件」。「称呼ノ門(コト)」に「さん」付けて呼び合うと書かれている。(1-31)

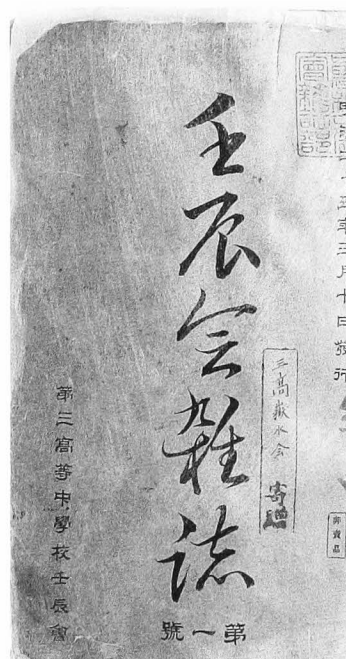
落書毀損等ハ償部ノ出来能フタケハ今後償部
セシムヘキ
一 後來ハ一層論議ヲ嚴スヘキ
一 諸業主ノ知ルルハ既クテ發條ノ法ヲ求メ
一 猶臨時協議會等ヲ開クアルヘキ
一 教場内ニテハ今後寛クシテ心カシメル
一 廊下等ハ砂節ヲ設ケシム
一 教場内ハ既ニ整ヘカラル
一 自今帽ハ教場内ニ持入リ適宜場所ニ置クヘキ
一 教場ニ入ルハトスルハ帽ヲ脱スヘキ
一 凡ヘテ教場ヲ出テトスルハ教師ノ許ヲ得ヘキ
一 今後一層敬禮ヲ嚴スヘキ
一 必傳リテ為ニ偏ニ中心致
一 意ヲ合ハシテ主トシ

生徒取締上ノ件
明治廿二年九月十四日午後第三時前
學校内外ヲ論セテ今後出来能フタケ取締セキ
學校ノ家屋器物ヲ汚損セシムル様戒ムヘキ
落書等三月ヲハ職員各生徒何級何組ヲ論セキ
職員各生徒何級何組ヲ論セキ

頁各自ノ
即姓名ヲ
ナリ故ニ時
得サル
四章ノ上條



第三高等学校に対する法学部開設許可(1890年)。(1-32)



「壬辰会雑誌」第1号。壬辰会は1892年2月に発足、各種課外活動の組織化を行った。(1-33)



第三高等学校解散記念碑。1894年本科および予科の廃止にあたって所属していた生徒は他の高等学校に分かれて配属されることになり分袂式が行われた。写真の碑はその記念につくられたもので、本部正門に入って東側に現存している。(1-34)

その後の第三高等学校

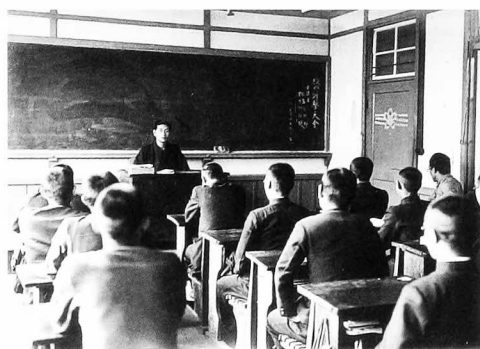
旧制高等学校の多くは、独自の校風を標榜していたが、第三高等学校では折田校長以来の「自由の校風」がその後も長く受けつがれた。運動部・文化部の活躍、多彩な人材の輩出などはそのことを物語っている。現在の京大でいわれる「自由の学風」のうちのある部分は三高から引き継がれたものであるといえるかもしれない。



本館前の記念撮影。1904、5年頃と思われる。前列右から6人目に折田校長の顔が見える。なお、後ろの木造の本館は1934年の室戸台風による被害を機に鉄筋コンクリート造り三階建てのもの(現:総合人間学部A号館東半分)に建てかえられた。(1-35)



運動会余興後の記念撮影(1907年ごろ)。後ろのはのちに自由寮の名称で知られた寄宿舎。(1-36)



授業風景(1938年ごろ)。扉に三高の徽章が描かれている。(1-37)



校内野球大会(1938年ごろ)。(1-38)



本館屋上でのスナップ。京大は文字通り指呼の間にあった。(1-39)